



|              |   |
|--------------|---|
| Title        | 宗教の心のはたらき   |
| Author(s)    | 川尻, 進   |
| Citation     | 懐徳. 1963, 34, p. 59-60  |
| Version Type | VoR   |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/90389">https://hdl.handle.net/11094/90389</a> |
| rights       |   |
| Note         |   |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 宗教の心のはたらき

川 尻 進

八月半のある日、急に思い立つて、京都洛北に、中風を病む従姉を見舞うことにした。

病状ははかばかしくない様子であつた。

當主は、その長男で齡五十、目下市内のある大學に奉職中の一科學者である。雜談に耽けるうち、たまたま宗教問題に觸れたとき、最近眞宗の某大家の講演を聞いて納得し難いところがあると。その意味は宗教とはどこまでも個人的のものであつて、對社會的の問題はまた自づから別の問題に屬するとゆうことであつたらしい。筆者もそれでよいではないかと言つて、卑近な例を一、二あげて應答してみたが、いつかな承知してくれない。

歸途漫殊院の庭の枯山水を賞して京都を離れた。歸宅早々あれこれと心當りの書物を繙いて、適當な解説をと搜し求めているうち、漸くにして次の文章に遭遇して、やつとの思いでその要點を抄出して、書き送ることにした。

◎富士川游著述編第三卷、宗教的内省、聞法生活の  
宗教より

「宗教といふことにつてきはこれまで多くの學者から種々に定義せられて居る。普通に宗教といはれるものには、宗教と名づけられるところの心のはたらきとさうしてそれにもとづきてあらはれるところの種々の形式（たとへば寺院・教會・僧侶・教義など）との二つのものが含まれて居るから、第一にまづこの二つの種類を區別して考へねばならぬ。

宗教の形式といふものは宗教的の思考によりて次第に發達するものであるから、野蠻人の宗教の形式と文明人の宗教の形式とは著しい相異があつて簡単に定義を下すことは出來ぬ、同じ時代の人の間にありても、年齢の若きものと年齢の長けたものとの間にも、又個人と個人との間にも種々の差別を示している。しかしながらそれ

について敍述することは今ここに必要とするところではない。

生きた神や佛が果して存在するものであるかどうかといふやうなことは形而上學で研究すべきものである。宗教の心のはたらきはそういう形而上學の研究によりてあらはれるものではない。

神や佛についてわれわれは客觀的に言うことが出来るかどうかといふやうなことは神學若しくは宗教哲學の問題で宗教の心のはたらきはこれ等の神學や哲學の思考によりてあらはれて來るものではない。

我々が如何にして神や佛を知ることが出来るかといふことは認識論の上から研究すべきことである。宗教の心のはたらきはさういふ認識論的の説明を要せずして自ら心の中にある種特別の心のはたらきである。

宗教の心のはたらきはかやうに我々の精神の現象とし

てあらはれるもので、しかもそれは我々の精神生活の中枢を占めて居るものである。それ故に宗教の心のはたらきは、その影響を學術・工藝・教育・政治及び風儀の上に及ぼして我々の日常生活と相離るべからざるものである。

私が今ここに宗教といふものは、かやうな心のはたらきを指すのである。

それに本づきてあらはれて來るところの、宗教の形式につきて言ふのでは決してない」と。

#### 筆者附記

右は要するに、一般に宗教とゆうものについて、全く無關心か或はまた認識において、甚だ徹底を缺くところあることを慨いて、敢えて筆を執つた次第である。